

シリーズ

「ある監督官の問はず語り」(第 12 回)
—野島断層は語り掛ける—

あの日、筆者は霞ヶ関で仕事をしていた。

午後三時過ぎ。ふと、机の上のペン立てがカラカラと音を立てた。またか——筆者の頭には数日前の地震のことがあった。あときは震度 4。最近では地震が多いな——。

だが、そんな呑気さも数秒後には吹き飛んだ。想像していた以上の揺れが襲ってきたからだ。ペン立ては倒れ、山と積んだ書類が崩れ落ちた。斜め後ろにいた女性の同僚が「キャッ」と悲鳴を上げた。筆者も一旦は腰を上げたものの、立っていることができずにその場にへたり込んでしまった。一体、何が起きているんだ? 慄きとともに窓の外を見ると、そこには信じられない光景が広がっていた。

窓の外で静かに揺れるビル群。頂上が曲がった東京タワー。不穏にざわめく日比谷公園の木々——筆者はそこでようやく理解した。何か、想定外のことが起きていると。

——平成 23 年 3 月 11 日。宮城県沖を震源とする東日本大震災が東北・関東地方を襲った。

未曾有の災害は、ほどなくしてレベル 7 の原発事故を誘発する。たまたま放射線担当だった筆者は、その後一年間、労働者の放射線防護対策や法令改正等に日々追われることとなった(被災された方々のことを思えば、筆者の苦勞など露ほどのものでもないが)。

だから 2 年前、兵庫に赴任すると聞いて、まず淡路島の野島断層を見なければと考えた。

阪神淡路大震災。この出来事は、平成 7 年 1 月 17 日の発生当時東京にいた筆者の記憶にもいまだ鮮明に残っている。燃える街並み。横倒しになった高速道路。駅は落ち、空が煙で不穏な灰色に染まった光景は、忘れようとしても忘れられない。

東日本大震災に関わった筆者が、阪神淡路大震災の爪痕残る土地にお世話になる。これはきっと何かの縁に違いない。筆者は、赴任したならば取りも直さず地震の原因となった断層をまず見なければならぬと感じた。

——念願が叶ったのは、赴任した翌月のゴールデンウィークだった。

明石海峡大橋を渡り訪れた断層は、今は保存され、屋根の下にあった。断層の真上にあったという家も当時のままに残され、傾いた柱や、段違いになった道、壊れた塀、その他、地震のエネルギー

の大きさを示すあらゆる痕跡を無言で見て回った。体感コーナーで震度 7 も体験し、災害のエネルギーの大きさがどれほどのものであったかを身体で感じてきた。稀有な経験であり、そして、心からここを訪れてよかったと思ったのを覚えている。

それからというもの、神戸に住んでいると聞き、観光の足掛かりにしようと企む親戚・友人がたくさん筆者の元を訪れた。北野異人館、元町、ハーバーランド、六甲山、姫路城、京都、大阪。そうした場所に連れて行けという彼らの口を押えつつ、いつも筆者はまず最初に、野島断層を見せに行った。初めは不服そうに口を尖らせていた彼らも、しかし断層を目の当たりに一様に神妙な顔つきへと変わった。きっと筆者と同じように、テレビでしか知らなかった震災の恐ろしさを肌で感じたのだらうと思う。関東の人間(筆者の親戚・友人は概ね関東住まいだ)にとって、それは 23 年前の阪神淡路大震災の悲惨さを、そして、早くも忘れ始めていた東日本大震災のことを思い出させるものだったのだ。

——昨年末、北海道沖で巨大地震が起こる可能性が極めて高いというニュースが流れた。

これは、北海道が危ないというよりも、日本のすべてに同様の災害が起こる可能性を示唆するものだ。ある資料によれば、過去千年で震度 7 を経験していない都道府県は富山県しかないそうだ。裏を返せば、どこに、いつ、巨大地震が発生しないとも限らない。

兵庫ももちろん、大丈夫だということはない。野島断層以外にもエネルギーを溜め込んだ断層はたくさんあるし、南海トラフ地震の危険性も指摘され続けている。今は整然とした街並みが、翌朝には壊滅し炎に舐められているかもしれないのだ。その恐ろしさは、いつも身近なものでなければならぬ。

関東大震災で、筆者の大叔父は材木の下敷きになり亡くなった。次の大震災で、当の筆者が必ず生き残れるという保証はどこにもない。災害はまさに不幸なくじ引きだが、ハズレを引かない確率を高めるために、普段の生活の中でできることもきっとあるだろう。

多くのことを示唆してくれた野島断層に、筆者はこれからも知人を案内していきたいと思う。